環境で地方を元気にする
地域循環共生圏づくりプラットフォーム事業

キックオフ・ミーティング

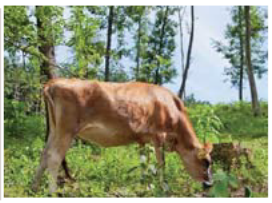
活動団体名：一般社団法人　スマート・テロワール協会

活動地域　：**長野県・北信地域**

（長野県小布施町を核として、長野市、高山村、須坂市、中野市、飯綱町、飯山市、信濃町、木島平村、栄村、山ノ内町）

北信スマートテロワール

日本の明日の農村



地域循環共生圏を活用して目指す地域の姿

◆地域循環共生圏を活用して目指す地域の姿

信州スマートテロワール：長野県における自給圏の姿

農業を核とした自立（自律）分散型農村による共（競）創ネットワーク

国民の生存基盤の形成	• 食料自給率38%→70% • 種子開発、品質改善 • 食の安全、安心
東京一極集中から脱却して地方創生	• 若者の農村回帰→出生率向上→人口増加 • 若者の農村回帰→地方創生 • 農村部の未利用資源の活用
日本経済衰退から持続的成長軌道へ このままでは経済衰退	• 地域の核となる加工施設拠点 • イノベーションが連続して生まれる異分野交流の場づくり • EV化、シェアエコノミー化による新しい地域交通 • 消費の質の向上、生産者支援につながる消費

背景

スマート・テロワールの定義

信州スマートテロワール
日本の明日の農村

● テロワールとは

ただの自然ではない：地元の人によって、使用される**土地**のこと

ただの農地ではない：農業的な適性（土壌、気候、地形など）や農業技術の良し悪しの観点から考察される特定地域の**土地**のこと

ただの地元産ではない：そこで産出され・加工される農産物・食品・飲料が、その**土地（農地、農村、地域）を表現**する。**景観やライフスタイル、**味わい、消費モデル。

● 「スマート（賢明な・洗練された・活発）」な「テロワール」とは

日本全体で、人口30～40万人規模の**「農村地域経済圏」**を定め、「スマート」（賢明＋洗練＋活発）に「テロワール」を実現する**「美しく・個性的で・豊穣な地域自給圏」**を創造していくこと。

元　カルビー(株) 相談役 **松尾雅彦**

地域の現状と課題

現状

◎活動地域の概要（長野県小布施町）

江戸時代、長野県小布施町は、葛飾北斎が訪れ今や世界の遺産とも言える肉筆画が遺されました。栗や花、そして官民協働のまちづくりでも有名となった小布施町は、皆で自由闊達な討論を重ね「協働と交流の町」をつくりあげ、年間100万人が訪ねる長野県で一番小さな町となりました。**地方創生が始まったこの10年で、北信地域において農業や牧畜、地域電力や道路や農村景観（インフラ）、六次産業、ワイナリー、農村レストラン等が現れ、自律（自立）を目指す地元の若者や町UIターンの人々により、新たな動き（産業やビジョン）が生まれて来ている。**

課　題

◎現状から考える地域の課題

①コメ中心の農政で、畑作穀物と畜産の衰退→日本の食料自給率（カロリーベース）の減少
②消費者の欲求変化への対応に失敗
③品質管理の不在
④農畜産物産出額の減少
⑤経営耕地面積の減少
⑥活用できる稼げる技術・知見が不足している。
⑦新規就農者の確保と技術実践場所が少ないことが課題

◎今後取り組むべき課題

1．農業の継続性、果物の価値の向上

→　新商品の企画・開発・製造・販売を支援し、売れる商品を生み出す

2．農工（耕）一体の実現→　果物の稼ぐ力を強化（稼げる技術習得支援）

地消地産を一層推進するため、耕畜連携と農業・食品加工業連携(農工連携)による農業生産、農産物加工及び地元消費の地域内循環システムを構築する。
・「見る研修」から「実践する研修」で短期技術習得（技術習得実践道場）
優秀な加工技術者や先駆的経営者（マネージャー）から、ノウハウを学ぶ

3．地域内加工・消費の実証

・実証試験ほ場から生産される農産物（栗、ワイン葡萄、水田）について、加工事業者と協働し農産加工品の試作を行うとともに、実需者を含めた検討会の開催により、地域食料自給圏の検証を進める。

信州スマートテロワール
日本の明日の農村

◎活動地域の特性（強み・弱み）

1. 従来、新開発の地場資源としての果実

2. 栗に代表される農業的加工事業者

3. 優良で志の高い企業との協働

4. 自然エネルギーの活用、人のための道づくりをテーマにした国道整備などインフラへの展開

5. 次世代による新たな動き（内も外も）

◎今後取り組むべき課題

信州スマートテロワール
日本の明日の農村

1．農業の継続性、果物の価値の向上

→　新商品の企画・開発・製造・販売を支援し、売れる商品を生み出す

2．農工（耕）一体の実現

→　果物の稼ぐ力を強化（稼げる技術習得支援）

地消地産を一層推進するため、耕畜連携と農業・食品加工業連携(農工連携)による農業生産、農産物加工及び地元消費の地域内循環システムを構築する。

・「見る研修」から「実践する研修」で短期技術習得（技術習得実践道場）

優秀な加工技術者や先駆的経営者（マネージャー）から、ノウハウを学ぶ

3．地域内加工・消費の実証

地域循環共生圏を活用して目指す地域の実現のために

戦略１．強い農業ができるイノベーション・トライアングル

１．供給者主導の市場経済から消費者主体の経済システムへ（消費者の需要家としての立場を重視→求められる商品を提案する）

２．農業生産と加工プロセスの連結（加工場の拠点）により良い多様な加工品づくりのための３つのイノベーション（**プロセスイノベーション-プロダクトイノベーション-マインドイノベーション**）を起こす。

戦略2．農業を核としたプラットホーム（ネットワーク、インフラ）づくり

〇北信での暮らし方（ライフスタイル）の提案

・土、水、食、家　→ 地域のアイデンティティを見直す、つくりなおす

〇地域に密着し広く展開できる**加工場**

〇質の高い消費の場

・質の高い消費　レストラン・ワイン・生鮮

・都市圏と繋がり、暮らし（スタイル）を発信

・クオリティの高いものを地域のマルシェで取引

戦略3．畜産と畑作の距離を近くし畜産（牧場）を域内に備える

産環境と農村景観の悪化　⇒　遊休荒廃果樹園地を生産性の高い圃場（農場や牧場）へ⇒農業の基盤となる「土づくり」につなげる

キーワードは「置換」

・輸入（小麦・大豆）を地域内の生産に「置換」できれば、地消地産の道が開ける。

・水田から畑作の置換の検討。小布施はそもそも水田に向いていない。だからこそ、栗などの加工作物が発展。

戦略4．住みたいと思う町の景観づくり～インフラの顕在化・産業の表象

・畜産（畑作）によって土ができる。同時に「景観」ができる（**牧畜連携**）

・道景観は他の町とも繋がる大事なインフラ（ネットワーク、葡萄の幹）として重要

ワインバレー、アートライン

・葡萄型の町並（交流の町）と**林檎型の町**（強いコミュニティで地域特性を守る）の表出

今後の事業取り組み予定

地域循環共生圏を構築する上で、今後必要となるもの

事業1：ベース情報の整理

小布施町及び北信地域における農産物の消費と生産（自給の状況）のデータ整理及び主要農産物の生産団体、加工業者の整理、田畑の**遊休農地の把握。**

事業２：スマートテロワールの実現に必要な要素と戦略を学ぶ勉強会（全4回）

プラットフォームでは、研修を通して次代のネットワーク担うステークホルダーと、先駆的思想を持ったフロントランナー（経営者、実践者、有識者）との交流を通して、ステークホルダー同士のコミュニーケションが少ないという課題を解決する。

事業３：ネットワーク化シンポジウム「食と農を地域に取り戻す（仮）」

場所：小布施町、内容：アドバイザーによる講演会

スマート・テロワールの実現のために必要な見識や先駆事例を学ぶために講師を招き、北信スマート・テロワールとこれからの農村の経済成長についてや「住みたくなる地域のデザイン」についてシンポジウムを開催。実践のためのステークホルダーのネットワーク化を図る。

地域社会における循環型資源の活用と持続可能な農村づくりを推奨する藻谷氏と、ポートランドやゼンパーなど世界6都市をデザインしたカルソープ氏を招き、住みたくなる町、スマート・テロワールの在り方を語る。北信スマート・テロワールを県内外、世界へ発信。

スケジュール（令和元年度）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
事業全体の予定				◇請負業者決定 ◇事務局設置 ◇キックオフミーティング			現地意見交換会			◇中間報告書提出期限 活動団体成果報告書提出◇	◇成果発表会 ◇シンポジウム	
ビジョンの策定					事業2. 勉強会の実施（4回） 第1回 9月3日（予定）							
							事業3. 11月23日（土）シンポジウムの開催		実施事業の検討			
ステークホルダーの巻き込み						事業1. 農業分野でのモデルベース開発の場を構築（MBDセンター）						
								プロトタイプ商品の検討				

北信スマート・テロワール

小布施町を中心とした北信濃地域プラットフォームの実施体制図